

第五章 考察

前章でコントの台本の分析を行ったところ、コント中に笑いが起こっているポイントは2つに分けられることが分かった。本章では、P. バーガーの著書 (Berger 1997) と照らし合わせ、第一節でコントで笑いが起こる理由、第二節では特定のポイントで笑いが起こる意味を掘り下げ、第三節では演じ手と聞き手の関係について考察していきたい。

第一節 笑いと第三者的視点

まず、巻末資料にはないが、次のコントの例を挙げて考えてみたい。これは、ある一家の父が突然家で倒れ、家族が救急車を呼ぶ場面である。

『糖尿病をほうっておくと』の巻より抜粋

登場人物

父：50代の会社員。消防団に入っているが運動習慣はあまりなく、甘いものが大好き。

母：50代の専業主婦

息子：30代の会社員

妹：嫁に出た父の妹

(妹が最近検診に行き、糖尿病が見つかる。母と妹が父にも検診を促している。居間での会話。)

父「ちょっと調子悪なってきた…(胸を抑える)」

母「え！？お父さんどうした？」

父「うっ……(胸を抑え、倒れる)」

一同「お父さん！大丈夫！??」

客(笑)

母「どうしようかどうしようか！えっと、なんだっけ？電話電話！救急車！110 やったけ！？」

妹「それ警察や！救急車何番やったあ？」

息子「救急車は…あれ？何番やったけ？」

客(笑)

息子「あー、119！もしもし、すみません救急車お願いします！お父さん倒れたんですお願いします！」

父「わし出動せないかんかな？」(消防団に入っているため)

息子「それ消防車消防車！」

客(笑)

以上のように、このシーンではお父さんが倒れたところで笑いが起こっている。もしこのような場面が日常生活の中で起こったとしたら、果たして私たちはその光景を見て笑うことができるだろうか。

この場面で笑いが起こる理由は、聞き手が外からの視点つまり第三者的視点からコントを見ているからである。聞き手は、コントで繰り広げられている世界に入り込んでいると思いきや、「これはコントの中の出来事であって、現実には起こったことではない」という認識のもと、外の世界からコントの世界を眺めているのである。だから、コント内のことが実際の世界で起こったとき、つまり、日常生活の中で逸脱的行動をとっている人を見たときや自分の身近な人が死や重い病に直面したときわたしたちは笑うことはできないのである。「滑稽なものの経験は苦痛のない世界を現前させる。(中略)一般にどんな喜劇も、本当の苦しみや本当の苦痛がそこへわりこむやいなや、即座に悲劇へと転化する」(Berger 1997:362)とバーガーは述べている。例えば、上に挙げたコントを見た聞き手の中で、本気で倒れた父のことを心配する人がいたとしたら、その人にとってそれはもう、喜劇(コント)ではなく、悲劇なのである。つまり、私たちは無意識に行っているが、喜劇を見る時には、コントの世界を現実のものと考えず、それ自体を楽しむことが大切なのである。このことは、テレビで流れるお笑いなどにも当てはまることであると考えられる。

次節では、2つのポイントについてそれぞれ笑いが起こる意味を考えていきたい。

第二節 笑いが逸脱的行動と死や重い病に関して起こることの意味

第一項 逸脱的行動について

バーガーは以下のように述べている。

ひとつは、滑稽なものの経験は世界のうちに客観的に外在する何かの知覚であり、たんに歴史的・社会的相対性に規定された主観的経験であるのではないということ。言い換えれば、この経験にはある種の認知成分が付随しているということである。だとすれば、そこで認識されるものとは何なのか？まさにそれこそ、哲学者たちがみごとに一貫して代々伝えてきた第二の洞察、すなわち秩序と無秩序とのズレ、また同様に、たえず秩序をもとめてやまない人間と、経験的世界の無秩序な現実とのズレである。(Berger 1997:71)

ここでは、バーガーの言う「秩序」を、聞き手が劇中で登場人物がとるであろうと考えている規範的行動の予測可能性として、「無秩序」を、聞き手の予想に反して登場人物がとる行動、つまり逸脱的行動がもたらす予測不可能性として解釈したい。この秩序と無秩序のズレを聞き手が目の当りにすることによって笑いが起こるのである。

では、なぜ『ズレ』を目の当たりにすることによって笑いが起こるのか。バーガーは以下のように述べている。「何かズレていると言うためには、その前提としてズレていない

ものに関する観念がなければならない、と」(Berger 1997:68) つまり、この場面で笑いが起こる理由は、聞き手が笑うポイント、つまり何が逸脱的行動であるかを理解しているからであると考えられる。そして、コントの台本も、聞き手が何が逸脱的行動であるかを理解しているということを前提に作成されているということになる。

ここで、第四章第一項で例 1 に挙げた「自分がもらった菓を他人と分け合う」という逸脱的行動について考えてみたい。コントの登場人物は、聞き手の目の前でコントという形で平然とこの逸脱的行動をやって見せる。そして聞き手が知識として持っていた「菓を他人と分け合ってはいけない(だから登場人物もそのように行動するだろう)」という「秩序」と、「他人と菓を分け合う」という「無秩序」とのズレを目の当たりにすることによって、聞き手から笑いが起こるのである。

この講座においてコントの後の講義で教わることは、そのうち「秩序」の部分にあたるが、そこには聞き手が一般常識として知っていることが多く含まれる。そういったことを普通の講演スタイルで教わっても聞き手にとっては何の面白味もないだろう。その一方、コントの台本を見れば分かるように、コント中で登場人物が行う逸脱的行動は、「他人と菓を分け合う」など、普段の生活で私たちが思わずとってしまいそうな行動が多い。何が逸脱的行動なのか聞き手が知っていて、演じ手がそのことを理解しているからこそ、講義形式でいけないことをいけないと直接言うのではなく、日常生活を舞台にした『コント』という形式でそういった行動を聞き手に見せ、各々で自分の生活を振り返り、本来は逸脱的行動であるということを再確認してもらうのである。⁽³⁾

第二項 死や重い病について

死や重い病というのは、一般的な講座でも非常に扱いづらい問題である。まして、それを笑い飛ばすなどといったことは可能なのであろうか。バーガーは著書の中でアリストテレスの言葉を以下のように引用している。「喜劇は悲劇と異なって、人生のそうした側面について苦痛なしに凝視することを可能にする」(Berger 1997:41)

死や重い病に対して、恐怖心を持っている人は少なくない。しかしそれらの問題は人間である以上避けて通ることはできない。そのため、死に対する恐怖をかき消したり、重い病を否定したりしてもあまり意味はなく、むしろそれらの問題に向き合わなければいけないのである。しかし、そういった問題を普通の講座で真剣に語られても、当然誰も笑うことはできない。そこでそういった問題をコントにすることによって、聞き手が楽しみながらこれらの問題に向き合うことができるよう、手助けをする役割をコントが果たしているのではないかと考えられる。また、それらを身近な問題としてとらえやすい高齢者だからこそ、このようなコントで笑いが起こるのだと考える。「言うまでもなく、ブラック・ユーモアの多くは死をめぐる表象から生まれる」(Berger 1997:208) とバーガーが述べている通り、それらはブラック・ユーモアであり、一歩間違えるとただの悪趣味になってしまう。また、「悲喜劇にも限界がある。もし葬儀の場で、子供たちの滑稽なふるまいを喜んだり、

心を慰められたりするひとがいるとしたら、それはたいてい故人の肉親でないひとたちである。悲しみがあまりに深いと、悲喜劇の入りこむ余地がなくなってしまうのだ。そこには深い愛があり、そのまえでは、滑稽なもので心を慰めようとどんなに善意を尽くして努力しても決して功を奏することがないし、実際そんなことはやらない方がよい」(Berger 1997:209) とバーガーが述べている通り、身近で緊急事態が発生した時や、あまりにも深い悲しみに襲われた際に「笑い」もしくは「笑いを提供するもの」は、その場にふさわしくないものとして捉えられる。

そういったデリケートな問題を笑うためには、演じ手が聞き手に対して親近感、そして安心感を持ってもらうことが必要である。そのために演じ手はコント中にいくつか工夫をしている。

まず工夫の一つとして、コントのセリフにおける(聞き手が普段使用している)富山弁の多用がある。巻末資料のコント台本の中から例を挙げる。

はる「あー、頭もの一なってきた。私、朝薬飲んだかな血圧の薬。あ、でもどうもない。でも忘れたな。あ、どうもない時ね、半分飲みゃあいいがやわ」

ここで使われている「もの一なつて」という表現は、富山県の西部で使われている方言「ものい」である。これは標準語では「調子が悪い、苦しい」という意味である。この他にもコント中には、「あいそむない(=さびしい)」「だら(=ばか)」「あたる(=もらう)」など、他県の人には通じないが、富山県民であれば普段から使用する方言が多数見られる。単語だけでなく、「～ちゃ」「～ながいけど、」といった語尾や接続の方言は、コント全体を通して見られた。演じ手は、南砺市や小矢部市など、富山県の西部出身者が多いため、演じ手はコント中にこれらの方言を日常会話のように違和感なく使うことができる。聞き手もまたその地方出身であることが多いため、聞き手にとっては、演じ手が自分と同じ世代で、同じ言葉をしゃべっていることになり、これだけで演じ手に対して親近感を持つことができるのである。また、コント中にそれぞれの地域の特産品の名前を出したり、その地域の住民の大半が利用する病院の名前を出したりすることも、方言を多用することと同じ効果があると考えられる。

また、コント中に見られる演じ手と聞き手のやりとりも、両者の距離を縮めるのに一役買っていると感じた。その一例を巻末資料のコント台本の下線部(波線)から一部抜粋する。

父「お父さん(検診に)何回行つとる?毎年行つとる?」(客に尋ねる)

客「毎年…」

父「おーえらいえらい」

息子「ほらー、毎年」

母「みんな胃の検診受けとんがけ!?!」

客(うなずく)

母「あらー…」

このように、コント中に演じ手が聞き手に対して問いかけを行っている。そしてこれに対して聞き手が答えている。ここで相互のやり取りが成立している。このやり取りは、地域の公民館のような狭い場所で、演じ手と聞き手が膝を突き合わせているからこそ可能なのではないかと考えた。演じ手の方から、「大きいステージだと観客との距離が遠くてやりにくい」という意見が聞かれたことからそう考えた。

こうした方言や双方向のやりとりを通してコントの場には、ある種の親近感が醸成させると考えられる。そして、そのような雰囲気の中でブラックユーモアが発せられ、聞き手はすぐに笑いで応じるのである。

第三項 演劇としてのコントが持つ意味

では、逸脱的行動を再確認し、死や重い病と向き合った後、聞き手はどうなるのか考察していきたい。

医療従事者が健康講座で聞き手に知識を提供・普及しようとするのと、そこに笑いを組み込むのでは、講座の「その後」である日常生活で知識を活かすことについて、どのようなスタンスの違いが生じるだろうか。また、死や重い病を医療従事者が真剣に語ることと、そこに笑いを組み込むのでは、どのような違いが生じるだろうか。

まず、第二章第二節で取り上げた「すこやか健康講座」と本論文の「コント DE 健康健康講座」を比較してみたい。前者は講座終了後に聞き手が大学側に講座の感想を送っているのに対して、後者はそういったことは行っていない。前者の目的は「情報提供(知識の普及)や動機付け支援」であるため、聞き手はその目的通りに知識をつけることができたか、医療従事者が毎回確かめることはこの講座において必要なことなのである。その一方で後者において演じ手が求める聞き手の反応は、「笑い」という形で講座の場で即座に返ってくる。そのため、講座後、改めて聞き手に感想を求めたりすることはしない。そして、聞き手が、知識を得ることができたかどうかを確かめることもしない。こういった、形に残る見返りや成果を求めないことも健康講座に笑いが融合することによって起こる、この講座の特徴なのではないかと感じた。

バーガーは笑いと悲劇の関係について以下のように述べている。

この笑いは悲劇を観ることで喚起される感情をかき消したり、否定したりしたのではない。ただ、おそらくそれは、そうした感情を堪えやすいものにすることで、観客が劇場を後にしたあとで、いくぶんか落ちついて日常の仕事に復帰することを可能にしたであろう。

(Berger 1997:38)

ここで、バーガーの言う「悲劇」はこの講座で逸脱的行動を確認すること、死や重い病と向き合うことであると考えたい。例えば、一般的な健康講座で、医療従事者が高齢者に死や重い病について真剣に考えさせると、高齢者は講座終了後、明るい気持ちで普段の生活に戻ることはなかなか難しいと思われる。そこに笑いが入ることによって、講座後、スムーズに日常生活に戻る手助けをし、また見たいと思わせることができるのではないかと考えられる。さらに、それを会場全体で行うことで一体感が出、さらに住民同士の交流が盛んになるのではないかと考えられる。

若月は以下のように述べている。

大切なのは、第一線の診療所の先生方が真剣な仕事を各地域でやることで、それが基本ですよね。そこに私どもが入ってもいいが、無理に押しつけをして、そのために地域の力を弱めてはいけない。（若月 2010:83）

この講座において、医療従事者といえども演技手は聞き手に、何が逸脱的行動かを理解させるが、それを日常生活の中で活かすことを迫らないし、また、死や重い病と向き合い続けることを強制はしない。「教えることは教えますから、後は聞き手の皆さんの判断で」というスタンスである。もちろん演技手は押しつけをするためにこの講座を開催しているわけではないし、聞き手も自分がコントから受ける影響を意識したこともないであろう。そして、この講座の開催自体も医療従事者発ではなく、すべて聞き手からの依頼によるものである。病気を治すのは医療従事者の仕事であるが、病気になる前に、病気予防の努力をしなければならないのは、他でもない、聞き手本人なのである。

第三節 コントを通して形成される医療従事者と住民の互恵的な関係

日常生活において死や重い病を笑うといったことは、一般的になかなか難しいことである。しかも、「治す」存在としての医療従事者は、そういったことから最もかけ離れた世界にいる。そのような医療従事者達が自ら道化師となりコントを演じることで、普段病院を訪れる患者になりうる人々と、死や重い病を一緒に笑える関係を作っている。この関係は、病院内では作ることができないものであり、まさにこの点にこそコントを介すことの意味があるのではないか。

また、先行研究で挙げたような一般的な健康講座では、

医療従事者＝知識や利益を与える

住民＝知識や利益を与えられる

という関係が成り立っているように感じる。しかし、今回の調査からこの『コント DE 健

『健康講座』においては、医療従事者も与えられるものが多いように感じた。そして、この活動が医療従事者の生活の一部に入り込んでいることが分かった。演じるメンバーの自分の生活におけるこの活動の位置づけは人それぞれだが、調査から主に以下の3つが挙げられるのではないかと考えた。

第一に、演じる側がづらいことや日頃のストレスから解放される場になっていること。山口さんは「がんの治療などづらいことや、研修や勉強会など大変な事が多く、この活動がないとやっていけない」と語っている。自分の考えたコントで聞き手に笑ってもらうことや、講座終了後の聞き手からの感謝の言葉によって日頃のストレスからの解放や癒しを求めているのではないかと感じた。

第二に、演じる側が自分自身の生きる活力を得る場になっていること。裏田さんは、病気を経験することで、何十年先の人生を考えるのではなく、今日明日を見つめて生きるようになった。そして「コントを通じてまず自分自身が笑いをもらい元気になっていきたい」と語っている。コントを演じることで聞き手に笑ってもらうことはもちろん大切だが、他の人のコントを見たり、住民と話したりして自分が笑うことによって一日一日の生きる活力を得ているのである。笑いによって自分がまず元気をもらい、そして医療従事者として、コントの演じ手として地域を元気にしていきたいと考えているのである。

第三に、地域住民と交流できる場になっていること。このボランティア活動は、コントを演じる側、聞く側どちらが欠けても成立しない。そして互いに恩恵を与えあっている。一種の互惠的関係が成り立っていると考えられる。インタビューやフィールドワークを通して、演じるメンバーに関しては、人脈もあり、スポーツや音楽といった趣味が広く活発な人が多いと感じた。また、講座に来る人も、多くが地域の他の行事にも参加しており、そして講座の後医療従事者に質問を行う人が多いことから、健康に興味がある人が多いと感じた。地域の公民館であるため、そこの行事に参加する人と言えばみな顔なじみの人ばかりで、さらに聞き手だけでなく演じ手もみな知り合いであることが多かった。講座の前後に演じ手、聞き手の近況報告や交流が盛んに行われていることから、講座のためだけというよりも、知り合いの住民との交流も兼ねて会場を訪れる人が多いと思われる。南砺市にある医療機関は、数が多いわけではなく、地域住民にとってはどれもなじみのあるものである。そこを活かした南砺市ならではのボランティア活動であるからこそ、地域のニーズも高く、16年も継続できたのではないだろうか。